

スポーツ医療のコンシェルジュ

中里伸也・Nクリニック院長

プロスポーツ選手から学生アスリート、一般患者まで幅広くサポートする中で豊富な経験から、クライアントのために本当に大切なことは何なのか語られる。スポーツ選手を取り巻く環境をよりよいものにするための提案である。

日本のスポーツ医療の現状

受傷したスポーツ選手が適切に競技に復帰するためには、スポーツ選手の身体を総合的に評価することが大切です。医療施設での治療やリハビリテーションだけでなく、スポーツ現場への復帰から再発予防までのコンディショニングまで、多岐にわたった関わりを持つ必要があります。このように、総合的にスポーツ選手のコンディショニングに貢献するドクターのことを「スポーツ・コンディショニングドクター」と私は捉えています。ですから、スポーツ・コンディショニングドクターとは、単に「ケガを治す」というドクターの仕事のみにとどまるものではないのです。

日々のさまざまな業務において、派閥や職種、専門職としてのプライドなどにより、その選手にとって望ましい領域横断的な連携を遮断し、閉鎖的なものになってしまうことを経験する場合があります。そのような場面に遭遇したとき、スポーツ医療の現場は混沌とし、迷宮の中をさまよっていると感じてしまいます。

私はこれまで、「誰を信用して治療したらよいのだろうか？」と疑問を持ちながら治療に取り組む選手を見てきました。このような犠牲者となる選手を生み出さないためにも、

スポーツ・コンディショニングドクターの存在が必要になると考えるのです。

日本には、スポーツドクター以外にも、スポーツ医療に関わりを持つ職種の人が非常に多く存在します。ATCや日体協AT、柔道整復師、鍼灸師、カイロプラクター、ストレングス&コンディショニングコーチ、管理栄養士などの有資格者や、研修生、無資格者の方も関わりを持っています。また、スポーツドクター資格においても、講習を受講するものの、現場での経験や技量を追求されるものまでには至っていません。ですから、スポーツドクターとしての現場力にばらつきが生じているのが実情であると言えるでしょう。スポーツ医療の現場では、さまざまな職種の方々と適切に関わりを持ち、時に統制を図る能力がスポーツドクターに求められます。しかし、全てのスポーツドクターが本当に信頼されて選手の身体を預かることができるのかと考えた場合、疑問が残るといのが現状なのではないでしょうか。

日本にも、以前からスポーツ現場に理解の深いドクターが存在します。しかし一方で、「ドクター主導の治療方針を選手に押しつけるスポーツドクター」「ドクター自身の保身のために、思い切った治療方針を

出すことができないスポーツドクター」も存在するのです。このような状態では、選手は将来を左右する重要な試合に出場することが困難になる場合が考えられます。スポーツ医療が選手の成長やキャリアアップを妨げることになりかねないのです。日本を代表するトップアスリートですら、「念のために休んでおいたほうがよい」といった曖昧な治療方針を出されることがあります。また、症状と画像所見の隔たりがあるにもかかわらず、「手術をしたほうがよい」と画像所見だけの安易な判断を選手に伝える場合もあります。要は、選手の置かれた状況を十分に配慮しないまま、安易な判断をしてしまう場合が非常に多いということなのです。

背景にある教育システム

このようなスポーツ医療の現状に関する問題の背景として、医者になってからの教育システムに問題があるのではないかと考えています。私は整形外科医ですが、大学の教育システムでの診断学について、非常に細かい指導や多くの経験を得ることができました。そして、整形外科は外科から分岐したところに位置しますから、主に行うのは手術になります。整形外科医のほとんどは診断学を学び、必要に応じた手術をする治療法を学ぶ機会は多くあるのです。これは、「病院で働くための教育システムはしっかりしている」といえるでしょう。

しかし、手術を必要としない人へ

の治療方針に関しては、ほとんどと言ってよいほど学びませんでした。つまり、スポーツ現場で困っている選手に対して、スポーツパフォーマンスを向上させるために必要なことを十分に習得していないということなのです。これは、スポーツ選手にとって最も必要かつ重要なアスレティックリハビリテーションやコンディショニングに関して、学ぶ機会が不十分であるということです。私は、日本の医師の教育システムが悪いと言っているわけではありません。その教育システムでは、スポーツ選手に対応する医師を育てることに向いていないと思っています。このことが、「医者手術をしたがる」「医者はすぐに休めと言う」といった否定的な印象を与えてしまったのでしょう。多くの手術を必要としないスポーツ選手の不信感に拍車をかけてしまったのではないかと考えるのです。

代替医療のメリットとデメリット

その一方で、鍼灸師や柔道整復師、マッサージ師は、手術という手段を持ちません。ですから、保存的療法に迷いなくまっすぐに取り組むことができます。また、スポーツ選手の立場からすると、「自分の身体をよく見てくれて触ってくれる」ということで、多くの選手がそれらの代替医療を受けるようになったと考えられます。しかし、代替医療を行っているセラピストは、レントゲンやMRIなどの画像診断を活用することができませんので、評価が不十分となってしまうことが考えられます。このことは仕方のない部分ですが、曖昧な部分が残っている評価のもとに治療が施され、その後に手遅れになってしまうことも目にしてきました。これは、代替医療が悪いという

ことではありません。医師による診断学に基づいた代替医療は非常に価値あるものだと思いますが、曖昧な部分や不確定要素が多い治療方針には危険が潜んでいるということなのです。このような治療によってマイナスに働いてしまい、重症化してしまった選手を多く見てきました。

適切な道筋をサポートする

このような選手に出会うと、選手が本当に望んでいることは何なのかを考えさせられます。「正確な診断をしてほしい」「手術は本当に必要なのか?」「手術後のリハビリはどのように進めるのか?」…、選手の思いは多岐にわたることでしょう。つまり、トレーニングやリハビリテーションなど、思い当たる不安要素を全てクリアにしたいのだと思います。

これらのことを解決するために、スポーツに関わるドクターは、正しい診断を追求するだけでなく、選手のスポーツへの完全復帰から予防までの道筋を適切に選択して導いていくサポートをすること、つまり「スポーツ医療のコンシェルジュになること」が、スポーツ・コンディショニングドクターの大切な仕事だと考えるのです。コンシェルジュとは、ホテルなどに入っているサービスの1つです。お客様の困っていることを解決したり、希望することを見つめたりしてくれる方のことです。

このことをスポーツ医療に置き換えると、選手が困っていることを提供することや、選手にとって一番よいと思われるものをいくつか提供して、希望に合った道筋を立ててあげる人が必要であると捉えているということです。つまり選手のニーズ(必要とすること)を満たすだけでなく、ウォンツ(欲すること)を提供する

ことができる人が必要だと思っています。そのために、スポーツ選手に関わる医師やセラピストは、自分の実力を分析し、自身の対応能力を高める努力を惜しまない姿勢が大切でしょう。そして、選手を中心とした考えに基づき、早期に、かつ確実にスポーツ現場に復帰できるような協力体制を構築できるドクターであるべきだと思います。時には、重要な試合に向けたピーキングを行っていくことも必要ですし、整形外科の診断学や治療などの知識のみにとらわれず、選手のために必要なものは何でも提供できる幅広い知識と提供環境を持ち合わせる事が重要だと考えています。

今回は、日本のスポーツ医療の現状から、スポーツ・コンディショニングドクターの必要性について紹介しました。次回は、スポーツ・コンディショニングドクターの役割について解説したいと思います。

(編集/南川哲人)

■メモ

Nクリニック

〒596-0045

大阪府岸和田市別所町3丁目10-10

TEL : 072-432-4976

<http://www.n-clin.com/index.htm>

